

# モンゴル都市周辺地域における家畜預託の実態と その変容についての歴史人類学的研究

富田 敬大

立命館大学衣笠総合研究機構 専門研究員

(現 立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 専門研究員)

## 緒 言

筆者はモンゴル国(以後、モンゴルと略す)において、人びとが家畜預託を通じた協力関係を構築しており、それらが社会主義時代から市場経済化後の現在にかけて維持されてきたことを見出した。本研究では、牧畜文化の一つである家畜預託を検討することを通じて、体制転換に伴う牧畜社会の変容を明らかにすることを目的とする。

牧畜民による家畜の授受として、贈与、交換のほか、長期にわたる貸借関係が存在することを、これまで多くの民族誌が指摘してきた。モンゴル牧畜社会を対象とした従来の研究では、社会主義革命以前の階層性を反映した家畜預託制度(スルク制)が研究者の関心を集めてきた<sup>1,2)</sup>。その一方で、現代における家畜預託を扱った研究は少ない。こうしたなか、生態学者のフェルナンデス・ヒメネスは、モンゴルにおける家畜預託が、親族や知人など親しい者のあいだの経済協力として行なわれており、それらが互酬的な倫理観によって支えられてきたことを指摘した<sup>3)</sup>。しかしながら、彼女の議論では、家畜預託の変化や国家の政治・経済とのかかわりがほとんど論じられていない。そこで本研究では、社会主義の選択と放棄、そして市場経済の受容という政治・経済の大きなうねりのなかで、モンゴルの人びとがどのように生き抜いてきたのかを、家畜預託をめぐる諸実践に着目して明らかにすることを目的とする。

## 研究方法

本研究では、社会主義から市場経済への移行に伴うモンゴル牧畜社会の変化と持続を明らかにするために、都市周辺地域における家畜預託の実態とその歴史的な変容について、一方では文書資料を収集・解読し、他方ではフィールドによる実態研究を行なう。具体的には以下の三つの点を明らかにする。

① 移行経済下の都市周辺地域における家畜預託の諸

実践とその特徴を解明する。

② 社会主義時代の農牧業開発が家畜の預受託関係に及ぼした影響について検討する。

③ 家畜預託の歴史的変容と今日的意義を明らかにする。

平成26年7月から8月、平成27年3月に現地調査を実施した。モンゴル北部・ボルガン県オルホン郡(第2村、第5村)およびセレンゲ郡(第5村)を調査地を選んだ(図1)。同地域は、1960年代に始まる鉱山開発により発

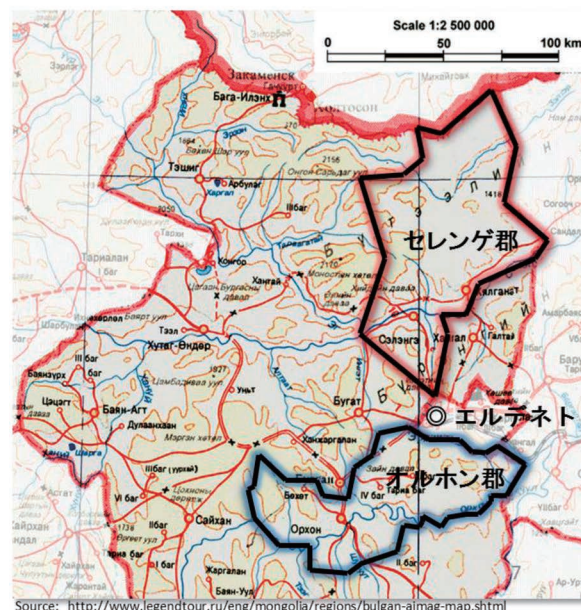


図1 調査地：モンゴル北部・ボルガン県オルホン郡およびセレンゲ郡

展したエルデネト市およびボルガン県の県都ボルガン市の近郊に位置しており、「草原」と「定住地」が高い密度で交錯していることから、都市住民または村落住民と牧民とのあいだの家畜預託を捉えるうえで格好のフィールドである。さらに、現地滞在中には、平成23年度より着手してきたボルガン県庁内公文書館における行政文書、統計資料の閲覧、デジタル化、複写を継続し、主要な資料群のデジタル化を完了することができた。本研究では、このうち、職業、家族構成、資産状況などが詳細に記録されたローカルな統計資料（『家畜資産台帳』等）の分析を中心に行なった。

## 結 果

### 1. 市場経済化後の家畜預託の実態およびその特徴

#### (1) 都市近郊の牧畜活動の現状

1990年代初頭に社会主義体制が崩壊した後、モンゴルでは、市場（都市、国境）からの距離に応じて、家畜の飼育や利用の仕方、すなわち牧畜戦略に格差が生じていることが注目されてきた<sup>4)</sup>。遠隔地に比べて、日用品や畜産物の輸送にかかるコストが低い都市近郊では、家畜群を維持することによる便益（畜産物売却、食糧確保など）が大きい。統計資料とフィールドワークによるデータをつき合せて検討した結果、都市近郊にある調査地では、牧民だけでなく、多くの村落住民が家畜を所有しており、そのいずれにおいても個人間のインフォーマルな家畜預託が重要な役割を果たしていることがわかった。

#### (2) 住民の生存戦略と家畜預託の担う役割の多様性

家畜預託（taviul mal）は一般に親族や知人など親しい者のあいだで行なわれている。調査地で確認された家畜預託は、大きく二つに分けられる。ひとつは、牧民同士の家畜預託で、もうひとつは、牧民と村落住民のあいだの家畜預託である。これらはともに、都市・定住地から草原へと家畜が預けられるという点で共通している。預託される家畜の種類や頭数は世帯によって差があるが、ヒツジやヤギなどの小家畜を数頭から数十頭程度預けるというのが一般的であった。また、預託の対価は、金品の授受以外にも、労働奉仕や輸送手段の手配など様々な方法で支払われる。ただし、これらはあくまで口頭上の同意によるもので、明確な契約内容を伴わない場合が多い。

まず、牧民同士の家畜預託について検討する。都市近郊にある調査地では、人口増加や土地不足によって、

大規模な畜群を維持することが困難であるため、小規模かつ定着的な牧畜経営の展開がみられる。調査地では、草原で家畜飼育を行なう人びとと、郡中心地で家畜飼育を行なう人びとに分かれる。このうち、定住地では、年金受給者や定職を持つ人びとが、ごく少数の家畜を自家消費用に飼育している場合がほとんどで、単独では家畜群を維持していくことが難しい。家畜の所有頭数が少ない彼らは、個別に種オスを確保できないので、秋になるとメス家畜を種オスがいない他世帯の群れに混ぜて種付けしている。また、牧畜作業にかかる労力を減らすために、自らの持つ家畜群の一部を、通年もしくは数ヶ月にわたり草原の牧民に預託している。このように、定住地の牧民は、家畜群のサイズ、労働力や土地の不足からくる問題に、家畜預託を通じて対処しているのである。

次に、牧民と村落住民のあいだの家畜預託について検討する。村落住民にとって、家畜群の維持は、食料の確保、財産の管理、現金獲得機会（家畜および畜産物の売却）の形成といった多面的な意義が認められる。村落住民は、原則として自らが必要なときに家畜を自由に処分できる。その代わりに、被預託者である牧民に、乳や毛（カシミアは除く）の利用を認めてきた。ところが近年、こうした状況に変化がみられる。都市近郊では、現金獲得の手段として、肉（＝生体売却）やカシミアとともに、牛乳・乳製品の売却が大きな位置を占めるようになった。それに伴い、村落住民のなかには、搾乳が盛んな夏季のみ草原へ出て、家畜飼育を行なう人びとの姿がみられる。

注意すべきは、こうした家畜の預け手と預かり手の関係（すなわち、村落住民と牧民の関係）が必ずしも固定的なものではないということである。家計をいかに維持するかという家族の生計戦略、そして進学や結婚など家族のライフサイクルにおける様々な変化が、草原から定住地へ、あるいは定住地から草原への人びとの移動を生み出している<sup>5)</sup>。このように、家畜の預け手と預かり手の関係が柔軟に変更されるようになった背景には、市場経済化後、草原と定住地の双方で選択しうる社会・経済的な選択肢が増加したことが関係しているものと思われる。

### 2. 社会主義時代の牧畜開発が家畜の預受託関係に及ぼした影響

社会主義時代、とりわけ1950年代後半の農牧業の集団化によって、牧畜は国家経済を支える主要な産業と

なった。新たにつくられた牧畜協同組合は、畜産物の生産地である草原と、その集散地であり、行政・経済の中心地でもある定住地の分業を基礎とするものであった。協同組合の中心地には行政集落がつくれ、人びとが牧畜以外の職業に就くことができるようになった。『家畜資産台帳』の分析から、非牧畜業従事者である村落住民の多くが、家畜を所有していたことが明らかとなった。ただし、当時は、自家飲用乳を確保するためのメスウシの飼育を除き、定住地で家畜を飼育することは原則として認められておらず、それゆえ大部分の家畜が草原に住む親族や知人のもとに預託されていた。このように、牧民と村落住民とのあいだの家畜預託は、市場経済化後に突如出現したわけではなく、協同組合期にその萌芽を見出すことができる。ただし、そもそも所有できる家畜頭数に制限（50頭：うち小家畜38頭、大家畜12頭）があったことや、肉、毛、乳など畜産物の供出義務が課されていたことなどから、家畜群の増殖はもとより、維持すら困難であったろう。したがって、家畜を預託する目的はあくまで食糧の確保が中心であって、家畜預託に現在のような多面的な意義を見出すことは難しいと考えられる。

## 考 察

本研究では、牧畜が集団化された1950年代後半から2000年代にかけての都市周辺地域における家畜預託の実態およびその歴史的な変容について検討を行なった。フィールドデータと統計資料を組み合わせた考察を行ない、以下のことが明らかとなった。

社会主義時代、特に1950年代後半の農牧業集団化に伴う社会・経済構造の変化のなかで、定住地から草原への個人間のインフォーマルな家畜預託が増加した。食料

の確保を目的とするこれら村落住民から牧民への家畜預託は、基本的に草原と定住地の分業を基礎とする牧畜協同組合ごとの生産関係にもとづくものであった。しかし、市場経済への以降後、牧畜協同組合のもとで維持されてきた諸制度がなくなったことや、家畜私有化により多くの人びとが家畜を手にしたことなどによって、牧畜戦略の多様化が進み、それに伴って家畜の預受託関係に変化が生じている。家畜預託が、食料の確保だけでなく、経済的な保障や、牧畜作業の省力化、家族の居所調整、牧畜スキルの習得など、多様な役割を担うようになった。また、地域を越えた複数の主体の錯綜した関係のなかで、家畜預託が行なわれるようになり、家畜の預け手と預かり手の関係も流動的なものになっている。その背景として、人びとが草原と都市・定住地の双方で生計手段を柔軟に選択していることがあげられる。これは、個人の経済活動が、社会主義体制下の生産関係にもとづくものから、市場との関係を踏まえたものに変化したことを反映していると考えられる。

## 謝 辞

本研究は、公益財団法人三島海雲記念財団の学術奨励基金の助成により実施されました。関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

## 文 献

- 1) H. Vreeland: *Mongol Community and Kinship Structure*, Hraf Press, 1962.
- 2) 利光有紀：史林, **69**, 140-164, 1986.
- 3) M. Fernandez-Gimenez: *Human Ecology*, **27**(1), 1-27, 1999.
- 4) 尾崎孝宏：沙漠研究, **23**(3), 111-118, 2013.
- 5) 富田敬大：生存学, **2**, 207-221, 2010.